

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

Dさん、あれから10数年が経ちました。あなたは今、どこでどう過ごされていますか。世界中で起きている性暴力を耳にすると、私はあなたに思いを巡らせます。私たちが別れた後、あなたがどんな人生をたどっていったのか、あの当時よりも安全に暮らしているだろうか、と。

イエメン南部の大都市アデンからずっと西に、国連が運営する難民キャンプがありました。この難民キャンプではいくつかのNPOが活動していて、性暴力サバイバーへの支援を行なっている団体もありました。アフワの難民登録センターで、国境なき医師団が関わった性暴力サバイバーへは、次の支援先としてこの団体が紹介されていました。ソマリアから逃げてきた人たちが、アフワの難民登録センターに滞在できる期間はそれほど長くないため、必要な方には次の支援先を紹介しなければなりません。でも残念なことに、私がアフワへ派遣された当初、次の支援団体へたどり着いた性暴力サバイバーはいないと聞いていました。私の重要な仕事の一つは、アフワの難民登録センターを離れたサバイバーたちが、次の支援先へつながるようにすることでした。

まず私は、難民キャンプ内にある国連事務所や性暴力サバイバーを支援するNPOなどを訪ねることにしました。治安の状況から、移動が簡単にはできませんでしたので、遠く離れた難民キャンプを訪ねることはなかなか難しく、数少ない機会を逃さないようにしないといけませんでした。

アフワを離れ、どこまで行ってもあまり景色の変わらない海岸沿いを西に車を走らせ、いくつかの検問所を通過してアデンへ着きます。そこからさらに西へ西へと進みます。とても高い岩山が見え始め、気がつけば景色が違ってきていました。イエメンの強い陽射しを遮るものがない道路を移動するだけで、ずいぶん体力を消耗するようになりました。

たぶん6時間くらいかかってようやく難民キャンプへ着いたと思います。一步キャンプに足を踏み入れた時、なんとか到着できたことにホッとしました。と同時に、にぎやかなキャンプの雰囲気、なんともいえない身の置き所のなさを感じました。私ですらこのように感じたのですから、数々の暴力にさらされながらソマリアから逃げてきた人たちにとっては、この難民キャンプに到着した時の安堵感はひとしおだったでしょうし、きっとその後の生活に対して不安も感じたことでしょう。



難民キャンプへ向かう途中の岩山



難民キャンプ

難民キャンプで活動する他の支援団体と会うことで、どうすれば性暴力サバイバーたちが次の支援へつながることができるのかが見えてきました。難民キャンプに到着した時に、何が行なわれるのかを私自身が知ること、そして連携できる団体のスタッフと顔なじみになっておくことが大事でした。しっかりと他の支援者と支援の土台を固めておくことは、私がサバイバーと会う時に力をくれたように感じます。

その後、私はアフワで何人もの性暴力サバイバーと会いました。密航という手段を選び性暴力被害に遭ったサバイバーは、自分自身を責めます。私は「あなたのせいではない」とくり返しますが、そんな言葉は空中に漂い、サバイバーの胸には届かないように感じることもしばしばでした。

それでも幸いなことに、ほとんどのサバイバーが次の支援団体とつながるようになりました。でも、さまざまな理由から、次の支援団体へつながらなかった方たちがいます。Dさん、あなたもそのお一人でした。

Dさん、あなたとはアフワの難民登録センターで出会いましたね。ここに到着するまでの道のりで性暴力に遭われた方は、本人、あるいは周囲にいた者がこっそりと医療スタッフへ打ち明けてくることが多かったです。サバイバーには、まず医療ケアを提供します。感染症や妊娠を防ぐためです。それから心理ケアに入りますが、なによりもサバイバーの安全を確保しないとはいけません。たいていのサバイバーは、加害者とは既に離れていましたので、難民登録センターではひとまず安心して過ごすことができていました。

ところが、Dさん、あなたを襲った加害者は、ソマリアから一緒に密航してきたグループのリーダーでした。このグループは難民キャンプへは行かず、イエメンを経由して別の国へ行くことを目指していましたね。そして、あなたはグループに留まり、加害者と一緒に移動を続けることを選びました。その決断に私は驚きましたが、あなたは「あの国には家族の一人が暮らしているので、到着したらすべてを話す。何とかしてくれるはずだ」と話していました。

Dさん、私は性暴力サバイバーの安全を確保するという、支援者として第一になすべきことが、あなたに対してできませんでした。支えになれなかった申し訳なさでいっぱいです。そしてまた、あの時あ

あなたが選択したことは、最悪の状況下でも、生き抜こうとするあなたの意志だったようにも感じるので。これは、私のひとりよがりな考えかもしれませんが。

Dさん、あの後無事にイエメンを出て、次の国までたどり着けたでしょうか。家族に性暴力被害のことをお話できたでしょうか。家族はあなたの気持ちに寄り添ってくれたでしょうか。そして、加害者に対して適切な対応をとってくれたでしょうか。あなたへの問いかけが、いくつもいくつも浮かび、それはそのまま、あの時私にできることはもっとなかっただろうか、という私自身への問いかけにつながります。

今のあなたが、あの頃よりも安全で穏やかに暮らしていることを、そして世界から性暴力がなくなることを心から祈っています。

*個人が特定されないよう、Dさんについては省略、改変してあります。